

序

“アレルギーマーチ”とは「アトピー素因のある人に、アレルギー疾患が次から次へと発症してしまう様子」を言い、年齢とともにまるで行進しているかのようにアレルギーの症状が変化していくことから名付けられた。実際に、食物アレルギーから発症し、アトピー性皮膚炎、気管支喘息、アレルギー性鼻結膜炎と、乳児期から学童期に年齢につれて疾患が変化していくことを指している。最近、アレルギー疾患発症の低年齢化と、アレルギーマーチとしての疾患発症順序が変化してきているとの報告も見られる。アレルギーマーチが提唱された当初の時代からは多少なりとも変わってきているようである。

小児においては、ほとんどのアレルギー疾患がガイドラインに準拠した治療の徹底で症状のコントロールができるようになってきた。しかし、厚生労働省研究班の調査では、アレルギー疾患を診療する医師の多くが、学会の定めた指針(ガイドライン)から外れた診療を行っているとの報告がなされている。このような状況では、診察室で目の前にいるアレルギー疾患をもつ子どもたちの良好なコントロールが維持されなくなり、その結果として、種々のアレルギー疾患へ進展していく、すなわちアレルギーマーチが進行することが懸念される。そのため、より一層ガイドラインに従った適切な治療が望まれる。

本書は、アレルギーマーチの発症・進展に関わる機序に迫り、アレルギーマーチを中心にした実地医家に対するガイドライン準拠による適正な治療の意義、アトピー性疾患の早期診断・早期治療介入の重要性、また薬物療法のみならず環境調整やアレルギー疾患の発症・進展の予防についても言及し、最終的には、「アレルギーマーチを断つ」ことを目指して企画したものである。

まずは、アレルギーマーチの発症・進展に関わる基盤となる分子機序を明らかにするために、アレルギー発症と臓器過敏性の2つの側面に注目した。アレルギー発症の要因と考えられる遺伝因子と環境因子、およびその相互作用やエピジェネティクスの視点から最新的话题を提供いただいた。さらに、衛生仮説や免疫学的パラダイムに加え、経皮感作等の感作経路からのアレルギーマーチを考察し、アレルギー発症の核心に迫ったと考えている。一方、アレルギー疾患の発症において重要な役割を果たしている、それぞれ疾患固有の臓器過敏性から、アレルギーマーチの発症・進展というテーマで概説いただいた。このような切り口での報告が少ない中、ご執筆いただいたエキスパートの先生方には原稿作成にご苦労されたのではないかと推察している。

次に、アレルギーマーチが進展することが予測可能かどうかという立場で、その予知因子として、特異的IgE (immunoglobulin E) 抗体、バイオマーカーや気道過敏性から解説していた

だいた。さらに、アレルギーマーチの予後として、様々な疾患が変遷していく途中でアウトグロ（寛解）していく患者もみられるが、どの段階でアウトグロしていくか、あるいはアウトグロする要因にどのようなものがあるかを概説いただいた。

ところで、未熟児（早期産児）は免疫学的には非常に未成熟な状態で出生し、かつ保育器という外界から遮断された特殊な環境で育成し、さらに抗菌薬や人工乳の使用頻度が高いため、その後にアレルギー疾患が発症していくのか非常に興味をもたれる。実際に、アレルギー疾患発症の実態についても記述いただいた。また、先天的因子（染色体異常など）、周産期の要因（低酸素性虚血性脳症の後遺症としての脳性麻痺）、さらに脳炎・脳症など様々な後天的原因で重症心身障害児となることがある。このような障害児は、屋外での活動が非常に少なく環境因子の曝露が限定された状態にある一方、感染や誤嚥により頻繁に喘鳴や呼吸障害を呈するため、気管支喘息との鑑別も難渋することが多い。このような状況下で、アレルギー疾患の発症頻度が多いかどうかの検討は少ない。アレルギー疾患発症を考える上で、特殊は免疫能や環境要因がどのように関与しているか明白になる可能性もあり、そのエキスパートの先生方に考察いただいた。

ガイドラインに関して、小児気管支喘息治療・管理ガイドライン（JPGL2012）には、「小児喘息の真の病態の解明にはほど遠く、発症の機序も未だ完全には解明されておらず、予防、診断、治療のいずれについても不完全である。したがって、それぞれのガイドラインも現時点でのエビデンスおよび専門家の意見に基づいた治療管理方針の標準的指針を示したに過ぎない。」と記載している。このようにガイドラインは、まだ完全なものではなく、新たな知見が蓄積されることにより変化していくものであり、今後の改訂により更なる充実を図っていくことが我々の責務であると考えている。

本書の企画作成において、アレルギー疾患を研究・診療をされている小児科、呼吸器内科、耳鼻咽喉科、皮膚科、基礎系（免疫学）のそれぞれエキスパートの先生方に原稿を依頼したところ快くお引き受けいただいた。各自の基礎あるいは臨床研究の成果や、実臨床ならではの鋭い観察力、さらに、最新の文献を多数紹介していただき考察が深まった。その結果アレルギーマーチというキーワードを中心に、充実した内容になった。ここで厚く御礼を述べたい。

本書が、どのようにアレルギーマーチが発症、進展していくかを常日頃診療している先生方にとって、改めてその進展予防への足がかりとなる一助になることを期待している。

2016年8月

群馬大学大学院医学系研究科小児科学分野教授
荒川 浩一